

東京―豊島区の国際アート・カルチャー都市構想

- ・豊島区は、マイナスのイメージや、人口減少で消滅可能性都市として知られるようになるという問題に直面していた。
- ・「国際アート・カルチャー都市構想」は、「選ばれるまち」とするために、芸術文化から豊島区のイメージを改善するために策定された。
- ・「国際アート・カルチャー特命大使」プログラムでは、1,200名以上の区民が応援団として、豊島区の普及活動を行っている。

どのような課題を抱えていますか？

2000年代前半、豊島区は、「怖い・暗い・汚いまち」のマイナスのイメージがあった。豊島区の逼迫した財政状況が原因で、まちづくりのために予算を割くことが出来なかった。

その解決策として、文化を中心としたまちづくりに取り組み、「愛され、自慢できるまち」を目指したところ、いくつかの成功に繋がった。東京都下初の「文化芸術創造都市部門文化庁長官表彰」を受賞した。

しかし、2014年、民間の有識者会議である「日本創成会議」から、豊島区が「消滅可能性都市」として指定された。人口減少が豊島区にとって深刻な問題となった。東京都の合計特殊出生率が1.09%なのに対して豊島区は0.93%である。さらに、豊島区は、20歳～39歳の年齢層の女性構成が少なく、この人口動態は2040年までに50%以上減少することが想定されている。出生率が増加しても、若年女性の減少が人口の維持を困難にするだろう。

豊島区は、出生率や経済活力の低下が原因で、街の魅力が低下するという課題に直面した。区民や区内企業が一緒に、競争力の低下につながる問題の解決に取り組まなければ、この問題を防ぐことはできなかった。

急激な高齢化社会では、自己実現の場、経済活動の場として、住む場所が選ばれる時代となる。豊島区が人々から「選ばれるまち」となるためには、強い個性や存在感を示し、明確な将来ビジョンを掲げて、地域に関わる必要がある。

これはどのようなプロジェクト？

この課題を、個別の都市が抱える問題としてではなく、豊島区は、日本全体の人口減少によって引き起こされた問題ととらえた。その問題解決に向けて、豊島区の境界線を超えて考えながら、全国的、国際的な取組を行った。

2014年に、豊島区は緊急対策本部を設置して、消滅可能性都市から脱却する持続発展都市づくりを進めることを掲げた、4つの対策の柱をたてた。その対策の柱の一つは、文化から都市開発や再生を行うことで、より多くの区民、ビジネス、外国人観光客を豊島区に呼び込むことだった。

「国際アート・カルチャー都市構想」はその柱の具体的な取組であり、豊島区が2000年から取り組んでいる都市再生事業の集大成である。芸術文化を用いて豊島区のイメージを改善することで、“選ばれるまち”としていく。区民の豊島区への誇りや愛情が熟成されることで、「人と産業をひきつける好循環を創出」する。←産業は **business** で英訳してください。

「まち全体が舞台の誰もが主役となれる劇場都市」を目標に掲げている。以前は、都市インフラや文化事業は独立して議論・実施されていたが、豊島区は、都市開発にはインテグラル・アプローチがより有効であるということに気が付いた。

このプロジェクトはどのような働きをしていますか？

全国的・国際的な都市の課題である人口の減少が引き起こす問題を解決するための先駆的な取組となる国際アート・カルチャー都市構想には、実現するための「3つの戦略」がある。

- ・ 文化的：サブカルチャーからハイカルチャー、伝統的な文化から最先端の文化まで、多様な文化が共存する世界に例を見ない豊島区らしい魅力があふれるまちづくり。
- ・ 国際的：東アジア文化都市事業を実施するなど、豊島区の魅力を世界に発信するとともに、外客誘致の環境（日本語だけ）を向上させる。
- ・ 空間：車から人優先に戻し、誰もが主役となるだけでなく、まち全体を（日本語だけ）世界中の人々との出会いが生まれる劇場都市（日本語だけ）に豊島区を変える。

ビジョンを実現するために、豊島区は、専門家や区民との対話を進めるほか、公の協議の場を設けた。このプロセスは他に類を見ないスピード感で進められた。

- ・ 2014年：芸術文化の最前線で活躍する専門家を国際アート・カルチャー都市プロデューサーに任命し、都市構想のアドバイスをもらった。
- ・ 2015年：構想を策定し、実現戦略を検討する「国際アート・カルチャー都市懇話会」（芸術文化のトップリーダーを始めとする専門家を含む31名の委員）を始動した。
- ・ 2016年：「国際アート・カルチャー特命大使」の活動を開始した。1,200名以上の特命大使となった区民が応援団として豊島区の普及活動を行うほか、区内外で積極的な役割を担っている。

この取組の結果、「消滅可能性都市」を短期間で「持続発展都市」に転換したまちとして、豊島区は、頻繁にマスコミに取り上げられている。

今後の予定

都市開発は、国際アート・カルチャー構想の一部である。池袋駅（豊島区の主要駅の1つ）から3分の旧庁舎地は、8つの劇場を含む、文化施設として再開発されている。

この豊島区のシンボルとなる新たなランドマーク「Hareza 池袋」は、世界のアーティストに新たな機会を創出するとともに、国内外の（日本語だけ）芸術文化のハブとなり、国

際アート・カルチャー都市構想の原動力となる。2019年秋にプレオープンする新ホールは、ミュージカル、歌劇、歌舞伎、オペラ、伝統芸能、コンサート等のあらゆるジャンルの公演に加えて、区民の成人式や学校行事等の多種多様な利用に対応でき、様々な芸術に触れる機会を提供するだけでなく、区民の人々が主役となれる特別な機会も提供する。

この劇場は、「まち全体が舞台の誰もが主役となれる劇場都市」を目指した区のレガシーにつながる場として期待が寄せられている。

さらに、豊島区は、「国際アート・カルチャー特命大使」である区民の方々等と力を合わせて、「持続可能な文化芸術創造都市」を目指していく。

学んだ点

- ・豊島区が文化芸術創造都市を目指した当初は、「文化によるまちづくり」に対する住民の理解を得ることができなかった。しかし、それ以降十数年の間、あらゆる主体と対話を重ね、区のビジョンを明確にすることによって、広く理解を得ることができた。一定の成果をあげたことにより、国際アート・カルチャー都市構想に、自信をもって取り組むことができるようになった。
- ・豊島区には、「池袋モンパルナス」「トキワ荘などのマンガの聖地」「小劇場」など地域に根付いている文化資源が点在している。豊島区の文化政策を進めていく過程で、伝統と現代の革新を特徴たてていく文化による都市戦略を定めることができた。地域に定着している既存の文化資源に新しい文化資源・施策を融合させることから恩恵を受けた。